

令和元年度糸島市協定大学課題解決型研究事業 実績報告

研究タイトル

糸島市における障がい者の文化活動促進と女性の多様なはたらき方研究
— 障がい者×女性×学生によるアートインレジデンス※¹を活用したアート・ブリュット※²の社会影響調査 —

※¹アートインレジデンス

一定期間ある土地に招聘し、その土地に滞在しながらの作品制作を行わせる事業

※²アート・ブリュット

「障がい者アート」を指す専門用語

研究者名

相模女子大学 学芸部英語文化コミュニケーション学科 教授 九里 徳泰

研究期間

令和元年6月1日 ～令和2年3月31日

研究計画の内容

障がい者のアート展示会等は少ないが、2018年に施行された「障害者による文化芸術の推進に関する法律」等を踏まえ、全国的に推進する動きがある。

市にある芸術施設と、障がい者施設を結び付け、アートインレジデンスを体験し作品制作を行い、社会参画や地域共生型アート活動に貢献する。

研究成果

現地紹介及び指導

Studio Kuraの施設（米蔵のギャラリーなど）や、レジデンスアーティスト（イギリス人版画アーティスト）を紹介。版画技法の実践的なデモンストレーションを実施。参加者は版画の実践に興味津々で、覗き込んで真剣に見入っており、刷り上がり時には歓声も上がった。

また、隣接の別のスタジオで展示があった平面作品も鑑賞。

次に、デッサン指導と、絵画造形指導を実施。デッサン指導には6名が参加した。絵画や石膏像などがある教室で、絵画に取り組むのに集中しやすい雰囲気の中実施した。デッサン未経験者ばかりだったが、全員集中して取り組めた。

高度な表現が出来る人には、講師が専門的な指導を行った。MUKAの職員の方が驚く程の腕前を披露した人もおり、それぞれの個性も現れたデッサンが完成

した。

絵画造形には7名が参加し「ちぎり絵技法」に挑戦。生き物や想像上の好きなものをモチーフに、それぞれ下絵を自由にしてから取り組んだ。楽しんで、バランスを見ながらカラフルに仕上げる事が出来た。この日は完成までは出来なかったが、施設に戻ってからでも取り組んで引き続き制作。お互いの作品をみて感想を述べ合うなど、意欲的に取り組めた。



撮影：StudioKURA

生徒A

Aさんは元看板職人だったので、もともと絵画の技術がハイレベルであった。新しい表現（ガラスの透け感や水の屈折など）を提案し、ガラス瓶に挿したパンジーをモチーフに、アクリル絵画に取り組んだ。「難しい」と緊張されていたが、とても熱心に取り組み、施設へ持ち帰り完成した。キャンバスに描いたのは初めてだったとのことだが、今後も『魅せる絵画』にも挑戦してほしい。



撮影：StudioKURA

生徒B

Bさんは個性を感じるイラスト風の画風がしっかりある方だったため、デッサンなどの描き方指導ではなく、個性を引き立てる為の支持体や技法で、さらなる魅力を引き出すよう提案。石粉粘土を使って絵に凹凸をつけて表現するレリーフ作りを実施。ご本人の感覚にととてもフィットしたようで、終始喜びの歌を歌いながらの楽しい指導となった。

初回で実施したちぎり絵も初めてだったがとても上手で、細かいこだわりのある仕上がりとなった。多くの技法（描き方）を知るきっかけになった。



撮影：StudioKURA

生徒C

パソコンを使って、マウスで描くという作風を活かせる、表現法に挑戦。プログラミングソフトの「スクラッチ」を使い、自分で描いたキャラクターが動いたり、ストーリーや司令に併せて変化をつけることが出来ることを楽しまれた（「カステラゲーム」）。指導の時間も楽しみながら取り組んでおり、今後も続けられるような環境設定も出来たので、引き続き深めていけると感じられた。自身の作品データを細分化して保管されているため、適性に合った作品作りが可能となる。



撮影：StudioKURA

結果

研究計画において本研究の実現に必要なことは「アートを制作する場、アートを発表する場、その実施を支える地域協働体制及び各主体間での情報交換の整備及びそれら事業への社会的「まなざし」」であると提言した。アートを制作する場として、社会福祉法人香月福祉会 MUKA の利用者に対するアートインレジデンスを行う Studio KURA のアーティストによる指導を行った。その実施を支える地域協働体制及び各主体間での情報交換の整備は、社会福祉法人香月福祉会 MUKA、アートインレジデンスを行う Studio KURA、糸島市役所、相模女子大の研究者において行われた。地域での第三者のコーディネーターは使わずに研究者が行った。所期の目的は達成できたが、複数のステークホルダーがあるが故、地域協働体制の確立に時間がかかることが判明した。第三者の地域コーディネーターがあるとよりスムーズに展開できたと考えられる。しかし、本事業へ地域のステークホルダーからの社会的「まなざし」は高いものがあり、本事業の成功のバックボーンとなったと考えられる。

アートインレジデンスにおけるアート指導は、Studio Kura の女性アーティストにより行われ、以下の4つの特徴を MUKA の利用者に提供された。

- ・創造力 — 様々な道具や素材を使った多彩な創作活動が想像力を高める。
- ・豊かな心 — 感情や情緒を育み、創造的で、個性的な心の働きを豊かにする。
- ・コラボ力 — グループで話し合い作っていく中で、現代社会で大事な単独では不可能なことを可能にし、乗り越えていく（コラボレーション力）を養う。
- ・国際交流 — Studio Kura が毎年約 100 名招聘している海外の作家がレッスンに参加することがあり、国際交流の貴重な機会になっている。

若い学生の力に関しては、相模女子大内での協力学生（3年生）と勉強会を開催し、ワークショップで学生の視点「まなざし」を本事業に提供した。

「糸島は、観光客の呼び込みだけでなく、移住者の呼び込みも成功しています。観光業だけでなく、地域活性化の成功の背景にも「人・場所・交流・体験」が関係していると考えます。「観光」や「移住者」による町への貢献と「障がい者アート活動」によるものではどのような違いがあるのか、それによる社会への影響などを研究したい。」「アートインレジデンスの活動を通して障がい者本人の意思や考えを尊重し、障がい者の自立と社会参加を促進するとともに、障害に対する自分自身を含める国民及び県民の理解と認識を深めたいと考えています。私は芸術に興味があります。芸術は言語の枠や文化の壁を越えていると考えています。作品の制作に携わることや鑑賞などの芸術との関わりは国籍やジェンダーなど人としての立場を気にする必要がないと感じているからです。この芸術を表現する大切さを実感することでより本調査研究に対する意欲が高まっています。」との意見があった。

本研究のキーワードは、観光、移住者、社会からの障害の理解、芸術の特性である。学生の視点は障がい者アートの社会からの受容及び影響であり、本事業の計画の詳細作成に貢献した。

当初計画では、「障がい者は、住み込みまたは通いで、このアートインレジデンスを体験し作品制作を行い、作品発表を行う。」とした。実際に糸島市内の Studio KURA の女性アーティストを中心に社会福祉法人香月福祉会 MUKA の利用者にアート指導を 4 回実践した。作品発表は、糸島市二丈松末、深江地区で行われる「糸島芸農」や福岡市で行われる「アートフェア アジア福岡」を計画したが、新型コロナウイルスの感染拡大によりともに延期となって実現できなかった。

最後に、本研究の最大の目的である「アール・ブリュット糸島モデルの構築」のプロセス①～⑤に関して研究成果を紹介する。

- ①ステークホルダー設定（障がい者施設、アート指導者、行政、コーディネーター（非営利組織：大学や NPO、協議会等）
- ②方針の決定（「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」（2018）に沿いながら、ステークホルダーの協議により地域の特性、ニーズを入れ込み作成を行う）
- ③協働による準備（コーディネーターが、障がい者施設のニーズ、アート指導者の技能、行政の必要な援助を調整し、方針に基づいた計画を立案する）
- ④事業の実施（事業の実施には、計画に必要な人・金・もの・情報の準備がいる。人：ステークホルダー、金：補助金、募金、クラウドファンディング、自己財源等、もの：アート活動を行う施設、情報：ステークホルダーの持つ技術やノウハウの確認、調整）
- ⑤事業評価（実施した事業の評価を計画に基づき行い、継続的改善点を行う）

本研究は、糸島市のアート活動が多様な方々の社会参画に貢献し、地域共生型アート活動に貢献したと考えられる。「アール・ブリュットを先駆けて実施した糸島モデル」を具現化し、コレクティブインパクト（各ステークホルダー組織（美術集団、障害者施設、自治体、大学）の集合効果・集合知）により、アール・ブリュットが日本のどの地域でも実践が可能であると提案できる。

成果を受けた担当部署の意見（人権福祉部 福祉支援課）

アートインレジデンスを行う糸島市内の StudioKURA の女性アーティストを中心に、社会福祉法人香月福祉会 MUKA の利用者にアート指導を実施。新型コロナウイルスの影響により、アール・ブリュットの社会影響調査まではできなかったが、今回の交流により、糸島でのアール・ブリュットが発展していくことが期待できる。